

2024年度

第1回

入学試験問題
国語

試験時間 50分

注意

- 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開いて見てはいけません。
- 問題は□から□まであり、全部で14ページです。足りないページや、印刷が不鮮明な箇所があった場合は、手をあげて監督者に申し出てください。
- 問題冊子と解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください。
- 解答は、すべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 問題の内容に関する質問は受け付けません。
- 試験終了後、監督者の指示に従い問題冊子と解答用紙を提出してください。
- 特に指示の無いかぎり、句読点や記号は1字で数えます。

校成学園女子高等学校

受験番号

□ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

高校三年生の知咲（「私」）は放送部に所属している。同学年の部員は部長の有紗だけである。有紗は一年生の頃からNHK杯全国高校放送コンテスト（Nコン）の全国大会に出場し続けているが、知咲は一年生のときの失敗からNコンへの出場を避けてきた。今年度の応募締切が迫る中、有紗から家の事情で休部することが告げられる。突然のことに衝撃を受けた知咲は、言い争いの末、放送室を後にする。

「……先輩？」

ふと声が聞こえ、私は顔だけをそちらに向けた。スタジオ側の扉から顔を出したのは、唯奈だった。彼女は私の異変に気が付いたのか、心配そうに近付いてくる。

「大丈夫ですか？」

問い掛けに、私は何も答えなかった。その反応を訝しく思ったのか、唯奈が困ったように眉尻を下げる。彼女の純粹な優しさが、今の私には煩わしかった。その柔らかな心を感情のままに傷付けてやりたい。① 理性が働く前に、激しい衝動が私の舌を支配した。

「うるさいなあ」

口から飛び出した声は、自分のものとは思えないほど低かった。怯えたように、唯奈がビクリと身を震わす。その反応にますます苛立ち、私は

A 舌打ちをした。

「アンタには関係ないじゃん、ほっといて」

唯奈の瞳が大きく見開かれる。こちらとの距離を取るように、彼女は一歩後退りした。これが、私と唯奈の本当の距離。唯奈が私を慕って来ていたのも、所詮は私が優しい先輩を演じていたからだ。

「先輩、私は——」

「私のことなんてどうでもいいでしょ。唯奈ちゃんにはもう、他にも友達がいるんだからさ」

悲鳴にも似た唯奈の台詞を遮り、私はそう吐き捨てた。振り返ることなく、B 廊下を走り抜ける。後ろから唯奈の声が聞こえてきたが、それもすべて無視した。

② 逃げ出したかった。過去からも、現在からも。

上履きのまま、私は駆けた。校舎に充滿する湿った空気を吸うことから耐えられず、私は学校を抜け出した。雨足は強くなる一方だったが、それでもかまわなかった。雲から滴り落ちる涙が、私のシャツを一瞬で濡らす。カッターシャツがじっとり貼り付き、白の布地からは肌の色が透けていた。びしょ濡れのまま制服姿で駆ける女子高生に、周囲から奇異の視線が突き刺さる。

「——はあっ、」

息が切れ、私は人気のない公園で立ち止まった。誰もいない噴水の前に蹲り、そのまま深く息を吸い込む。水分を含んだ空気はじつとりと重く、へ 1 へ、そんな気分になった。熱に浮かされた脳が、冷静さを取り戻す。沈黙した脳内で、唯奈の傷付いた表情が蘇った。馬鹿だ、私は大馬鹿だ。心配してくれた後輩に、あんな八つ当たりをするなんて。

——アンタさ、本当は私に勝ちたいんですよ。

有紗の声が、耳元で蘇る。私は唇を噛み締め、ぎゅつと目を瞑った。そうだ。私は有紗に負けたくなかった。だから有紗の前で無様な姿を晒したあの日以降、本番から逃げるようになったのだ。注目されるのが怖

かった。恥をかくのが怖かった。また失敗して、有紗から見下されたらどうしようって、そればかりを考えていた。だって、私は有紗と対等でありたかったから。

今になって気付いた。私が怖かったのは、他人からの視線じゃない。有紗から自分がどう見られているのか、そればかりを気にしていた。先ほどの傷付いた有紗の顔を思い出す。有紗だって、本当はあんなことを言いたくなかったに違いない。放送部を、朗読を、彼女はこよなく愛していた。きつと休部だってしたくなかったはずだ。そんな彼女にあんな顔をさせたのは、他でもない私だった。

「『でも、伝えようとしなきゃ、なんにも始まらないんだよ』」

唇からこぼれたのは、お気に入りの台詞だった。そうだ。最初から分かっていた。伝えようとしたって、伝わらない時がある。だから、ちゃんと手を伸ばさなきゃいけなかったのに。私はいつだって逃げてばかりだ。自分の自尊心だけが大切で、傷つくことが怖くて、そのせいで大事なものを見失う。

「ほんと、最低だ」

目頭が熱い。言葉が嗚咽おえつとなって、私の喉を震わせた。何を叫んだって、雨音で何も聞こえやしない。冷え切った指先を握りしめ、私は世界から身を守るように背中を丸めた。有紗のことが好きだから、だからカッコ悪い姿を見せるのが怖かったんだよ。そう、素直に言えばよかった。今さら後悔したって遅いけれど。私はゆるやかに瞼まぶたを閉じる。もう、何も考えなくなかった。

「先輩、」

ふと、世界から雨の音が消えた。女子にしては低い声が、私の耳元をくすぐった。温かな何かが私の手を優しく握る。冷えた皮膚越しに感じ

るじんわりとした熱に、私はゆっくりと顔を上げた。

「先輩、ここにいたんですね」

そこに立っていたのは、唯奈だった。随分と走り回ったのか、その肩は激しく上下していた。透明なビニール傘の端には黒い猫のマークが描かれており、そこを伝う雨がざあざあど地面に流れ落ちていく。彼女は私へ傘を差しだすと、今にも泣きだしそうな顔で言った。

「良かったです、生きてて」

その声があまりにも切迫していたものだから、私は思わず口元を緩めた。死ぬわけないよ。そう言おうとしたはずなのに、声は喉に張り付いてほとんど出てこなかった。さっき私が C 振り払ったはずの手が、真まっ直すぐにこちらへと伸びてくる。彼女の手は、私を求めていた。私だけを求めていた。伝わる熱が、私の意識を溶かしていく。皮膚越しに感じる熱が、今この世界で私が唯一信じられるものだった。

唯奈は縋すがりつくように私の背に腕を回すと、そのまま声を上げて泣き出した。

「死んじゃうかと思いました。先輩、ひどい顔してたから」

「そんなわけないじゃん」

今度はうまく声が出た。あやすように、私は彼女の背中を優しく撫なでる。唯奈の手から落ちた傘がぼしゃりと水たまりの上に落ちた。それでも、唯奈は私から手を離さなかった。

「駄目だよ、放送部が身体冷やしちゃ。風邪ひいたら喉やられるよ」

「それはこっちの台詞です」

彼女は乱暴な動きで自身の目を擦ると、ようやく私に抱き付くのをやめた。離れていく熱に未練を感じている自分の弱さに、無意識の内に苦笑する。唯奈は唇を嚙かんだまま、握りしめていた拳を開いた。

「有紗先輩が心配してました。他の部員たちに知咲先輩を探すように頼んで、それでみんな、先輩のこと探してるんです」

「有紗が私の心配を？」

「言はずぎちゃったって言ってました。先輩、元気なかったです」

彼女は捲し立てるようにそう言って、それからそつと踵を上げた。私
より拳一つ分低い場所にある彼女の目が、対等な視線を投げ掛けてくる。

「私、先輩のことをどうでもいいとか絶対に思わないです。先輩は自覚ないかもしれないですけど、初めて先輩が私に話し掛けてくれたとき、私、すつごく嬉しかったんです。だから、他に友達ができてでも知咲先輩は特別だし、私はどんな先輩でも好きでい続けると思っています」

そこで唯奈は一度言葉を切った。必死に話す彼女の目は真剣そのもので、そのがむしゃらさが今の私にはひどく心地よいもの思えた。

「正直に言って、私ちょっとだけほっとしたんです。知咲先輩っていつも優しいけど、なんか心に距離があるみたいに思ってたから。でも、私にほっといてって言った時の先輩の顔、すつごく苦しそうで、私が初めて見る顔で。もしかしたら弱いところを見せてくれたのかなって思って、そしたら、私いつも先輩にもらってばっかだったから、今ぐらい頑張らなきゃって。私、好きだってちゃんと伝えようと思って。先輩のこと大好きで、だから力になりたいって。ちゃんと伝えなきゃって、そう思ったら、気付いたらここにいたんです」

言いたいことを全て言い終えたのか、彼女はすつと口を噤んだ。その顔は真っ赤で、それが走り回ったせいなのか、それとも興奮しているせいなのか私には分からなかった。ただ一つ分かっているのは、私の顔もきつと赤いであろうということだけだった。恥ずかしさを誤魔化すように、私は乱暴に彼女の髪をかき混ぜた。胸の奥が温かくて、なんだか脳

95

が蕩けてしまいうさだった。誰かに求められるということは、こんなにも幸福なことなのか。そう思った途端、本音が口を衝いて出た。

「私、臆病者だった。伝えることから逃げてても、なんにも始まらないのにね」

自嘲交じりにこぼした言葉に、唯奈が驚いたように瞳を揺らした。目の前にいる二つ年下の少女は、こんな身勝手な先輩の為に勇気を振り絞ってくれた。彼女は私を受け入れてくれた。本当は、ずっと前からそうすべきだったんだ。現実の自分を受け入れて、前に進まなきゃならなかった。

私は地面に落ちていた傘を拾い上げると、それを唯奈へ差し出した。

「唯奈ちゃんは偉いね、ちゃんと伝えようとして」

「え、いや、別に偉いとかじゃないです」

今までの言動が恥ずかしくなったのか、唯奈はわたわたと首を左右に振った。その長い前髪が動きに合わせて揺れるのが何とも可愛らしくて、私は声を出して笑った。

「ありがとね。私も、勇気だしてみる」

まずは有紗に自分の気持ち伝えなきゃなあ。そう呟いた私に、唯奈はほっとしたように頬を緩めた。

「二人がいつも通りじゃないと、みんな心配しちゃいますから」

「ごめんね。先輩の喧嘩に巻き込んで」

「全然いいです、むしろもつと頼ってくれてもへっちゃらです」

そこで、ふと唯奈の視線が私の胸元で止まった。彼女は傘の柄を握りしめたまま、あの、と恥ずかしそうに口を開く。

「先輩、下着透けてます」

「まじか、最悪」

115

140

105

130

100

125

110

135

だが、ここまで濡れていたらそんなのは今更な気がする。自分の姿を見下ろしてみると、シャツはぐしょぐしょだし、上履きだつて泥だらけだった。目の前の唯奈も似たようなもので、その髪はびしょびしょだ。お互い馬鹿なことしてるな。そう思うと急にすべてが可笑しくなつて、私は衝動のままに笑い声をあげた。

145

「あめんぼ あかいな アイウエオ！」

いきなり大声をだした私に、唯奈が眼を見開いた。綻ぶその唇から、

へ 2 へ 笑いが弾けた。

150

「うきもに こえびも およいでる！」

唯奈が楽しげに続ける。大きい声を出すと、胸の中でもやもやと渦巻いていたものがスツと晴れていくような気がした。そうだ、私は声を出すのが好きだ。誰かの言葉を、自分の声に乗せるのが好き。自分の言葉を積み上げて、それを誰かに伝えるのが好き。全部、本当は好きなのだ。ただ、怖いことから逃げただけ。

155

眼前には横断歩道。信号機が青い光を点滅させている。私は唯奈の手を取ると、躊躇なく駆け出した。上履きが水たまりを踏みつけ、ばしゃりと水が飛び散った。

白線に足を踏み出し、私は言う。

「私、Nコンに出るよ」

160

⑤ 道を進む二人の背は、どちらも真っ直ぐに伸びていた。

(武田綾乃「白線と一步」)

*作問の都合上、一部省略・改変した箇所があります。

問一

A C に当てはまる語として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 完璧かんぺきに イ 一目散に
ウ 身勝手に エ 大仰に

問二

へ 1 へ 2 へ に当てはまる語句として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア ポップコーンみたいな
イ 水で薄めた絵の具みたいな
ウ 肺に鉛を流し込まれたような
エ ぎゅつと心臓をつかまれたような

問三 二重傍線部 a 「奇異」 b 「自嘲」の意味として最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 奇異

- ア 風景にそぐわないこと
- イ 様子が普通ではないこと
- ウ 道徳的に良くないこと
- エ 厳しくとがめること

b 自嘲

- ア 自然な表現で伝えること
- イ 自然に感情があふれ出ること
- ウ 自分で自分をばかにすること
- エ 自分自身を振り返ること

問四 傍線部①「理性が働く前に、激しい衝動が私の舌を支配した」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のことを理解してくれない唯奈に対して、突発的な怒りに任せて発言してしまったということ。
- イ 唯奈が優しく声をかける様子に苛立ってしまい、思ってもいないことを言ってしまったということ。
- ウ 優しい先輩を演じることができず、むしろくしゃした感情を唯奈にぶつけてしまったということ。
- エ Nコンに向けて協力しなくてはならないことを忘れ、後輩の唯奈に苛立ちをそのまま見せてしまったということ。

問五 傍線部②「逃げ出したかった」とありますが、「私」はどのようなことから逃げ出したかったのだと考えられますか。適当でないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のことを気遣う唯奈と時間をかけて対話すること。
- イ カッコ悪い姿を見せるのが怖いと素直に有紗に伝えること。
- ウ 失敗を恐れて挑戦を避けてきた自分の弱さを自覚すること。
- エ 部長の有紗と対等な関係であり続けたいと思うこと。

問六 傍線部③「私より拳一つ分低い場所にある彼女の目が、対等な視線を投げ掛けてくる」とありますが、このときの「私」の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」より背が低いことで卑屈になっていた唯奈が、自信を持っているようになったことがわかり、嬉しく思っている。

イ 先輩である「私」に従順であるはずの唯奈が、同学年のように意見を言ってきたので、戸惑っている。

ウ 同学年の友人を得て自信を持った唯奈が、「私」の弱さを見抜いて優位な立場に立とうとしているのを恐れている。

エ 「私」を慕う後輩としてしか見ていなかった唯奈が、自分の意見をはっきり伝えてくる様子を見て心強く感じている。

問七 傍線部④「現実の自分を受け入れて、前に進まなきゃならなかった」とあるが、これはどういうことですか。「現実の自分」、「前に進む」の内容を明らかにして答えなさい。

「現実の自分」とは、自分自身のことです。「前に進む」とは、自分の現状を受け入れ、前を向いて進んでいくことです。

問八 傍線部⑤「道を進む二人の背は、どちらも真っ直ぐに伸びていた」という情景は、どのようなことを表現していると考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 知咲と有紗の二人が仲直りを果たし、共通の目標だったNコン優勝に向けて努力していくということ。

イ 後輩である唯奈の言葉を深刻に受け止めた知咲が、誤解を解くために有紗と話し合おうとしているということ。

ウ 知咲と唯奈の二人が通じ合うことで、有紗のいない放送部をNコンに向けて盛り上げていくということ。

エ これまでに抱えていた悩みが吹っ切れた知咲と唯奈が、未来に向けて新しい第一歩を歩み始めたということ。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

AIと共存しながら人間らしく生きていくためには、^①生物としての野生の力も見直す必要があるのではないかと思います。

ぼくは、^{※1}フィールドワークの最中に何度も死にかけました。それでもまだ生き残っているのは、もちろん運もあるけれど、野生の力、^{※2}直観力も働いていたのかもしれないと思っています。

野生の世界というと、運がいいか悪いかで生死が決まるかのような印象があるかもしれませんが、ただの行き当たりばったりとは違います。「行き当たりばったりを予測している」のが野生です。

「A、何が起こってもおかしくないと思つて身構えていないといけない。突然、へびが出てくるかもしれないし、イノシシが飛び出してくるかもしれない。とっさの判断が求められます。ただ、そこで必ずしも正解を導き出す必要はありません。不正解でなければいいのです。いくらでも方法はある。その中で、とにかく間違つても自分が死ぬようなことにならないようにする身構えが大切なのです。」

(中 略)

人間も、言葉をしゃべるようになる前まで、こういう世界で身体も心もつくられていました。隠れているものを感じる能力も備わっていたはず。京都大学の近くに「哲学の道」という場所がありますが、この道にもぼくの耳では感知できないものがたくさんひそんでいます。見えている自然は、見えていないさまざまなものをつながりをもって成り立っていて、そのすべてのつながりの中に自分がある。そうしたつなが

りを感じる情緒を古来日本人はもち続けてきました。

ところが今、その心を失いつつある。^②フィクションの世界に住むようになった人間は、自分が知りたい情報だけを抽出して、あたかもそれが世界をつくっていると錯覚し始めています。インターネット社会の中で駆使されるのは視覚と聴覚だけです。目に見えないこと、耳に聞こえないことをないものとして排除し、見えるもの、聞こえるものだけで人間が住む世界をつくってきた結果、隠れているものがわからなくなりました。グーグルマップのようなナビゲーションシステムを利用しているとき、現実の五感で感じる世界は二の次になっているのではないでしょう。現代に生きるぼくたちは、バーチャル空間に生きているといつてもいい。アフリカのジャングルのフィールドワークでスマホのGPS機能を使う学生を見て驚いたことがあります。GPSを使えば、自分の位置と目的地までの距離や方向がすぐに出てきます。だから、なるべくまっすぐ目的地へ向かおうとします。でも、その間には川や湿地帯、棘のあるやぶや危険な動物がいそうな場所など、さまざまな障害があります。むしろ遠回りしたほうが安全に早く目的地に到達できる場合が多い。GPSだけに頼るとそういった判断ができません。

機械化、情報化が進む今だからこそ、^③もつと人間本来の能力を發揮できる環境をつくるべきだし、少なくともそういう方向に進むように調整すべきだと思います。とりわけ子どもの頃に、人間としての自分の身体がどういふ世界で生まれ、どんなふうにつくられているのかを自覚するチャンスが与えられなくてはいけない。そういう環境を与えるのはおとなです。

ぼく自身は、運がいいことに、部分的にでもそういう環境が与えられる少年時代を送ることができました。当時の東京・国立市にはまだ田園

20

15

10

5

45

40

35

30

25

風景が残っていて、クヌギ林もありました。^{※3}二次的自然であつても、今のコンクリートジャングルよりだいいぶましでしょう。だから、大学に入つて屋久島の原生林でサルを追い、アフリカの熱帯雨林でゴリラを追う生活の中で、人間の手の入っていない本物の自然と向き合うことで「人間というものが本来どんな生き物なのか」ということに気づく素地があつたのだと思います。それは非常にありがたいことでした。

もつといえ、^④このまま情報化が進めば、人間は「考える」ことを

やめるかもしれません。言葉が生まれたことで、人間の脳は発達をやめました。言葉が、視覚や聴覚、嗅覚を^{※4}担保してくれるおかげで、人間は自分の五感として脳の中に記憶しておく必要がなくなりました。見たものや感じたことを言葉でラベルしておけば、何かを見たときに言葉によつて思い出すことができるからです。

B 言葉を得たことは、

さらに人間は、テクノロジーを発達させ、その記憶媒体を大容量にしました。友だちの連絡先どころか、自分の携帯電話の番号さえ記憶していない人もいのではないのでしょうか。こうして、あらゆるものがデータベース化され、自分の脳を使わなくなっています。実際、現代の人間の脳は、1万2000年前に農耕牧畜を始めた頃の人間の脳より10%小さくなつているとする説もあります。われわれホモ・サピエンスより、すでに減びてしまったネアンデルタール人のほうが脳は大きかつたこともわかつています。

今は名前やモノのラベルを貼り付けているだけかもしれませんが、今後、「考える」能力まで外付けになる可能性があります。実際、その兆しはすでにあります。たとえば、ネット上のショッピングサイトで買い

50

55

60

65

70

物をする、次回から、そのサイトを開いたとき、「あなたはこういうものが好きなはず」「あなたはこういうものを選ぶはず」という具合に自分におすすめの商品が表示されますね。GAF A (グーグル、アマゾン、フェイスブック、アップル) に代表されるプラットフォーム企業は、個人の好みや傾向などのデータを大量に集約し、ビジネスに反映させています。そして人はそれに誘導され、やがて、買い物をするとき、自分で考えなくてもクリックするだけでよくなります。

人間はこれまでコンピュータを考え出し、インターネットを発明し、AIを発展させてきました。こうしたものを「考え出してきた」時代はよかつた。しかし、人間がこうしたものに誘導され、自分の好みはこうだと思ひ込まれてしまい、考えることをやめてしまつたら、自分の欲求はこの方向に向かつているに違いないと錯覚して、もうよくよくと考える必要がなくなります。もしかししたら、そのほうが楽かもしれません。でも楽になつたその自分とは、いったい何者なのでしょう。考えることをやめて、AIに操作される存在になつた人間は、もう人間ではなくなつてしまつたのではないのでしょうか。

ぼくたちが子どもの時代には、确实といわれる未来が、まだ見えていました。科学技術の進歩によつて幸福な時代を迎えられると信じていることができていた。課題がたくさんあつたからこそ、課題の解決は未来社会が担う役割であるということが明確でした。そして、課題が解決されたときの未来が、いかにも幸福な社会に映つたわけです。たとえば、病気が撲滅されて寿命が伸びる。世界各国の人々がビザなしで行き来できる。世界各地の人々と同時にコミュニケーションができる。そういう未来が目の前に迫っているような気がしたし、実際、予想した未来はやつ

75

80

85

90

95

てきました。

ところが、実際にその未来がやってきたら、その先に、解決できない未来が見えてしまいました。未来そのものが霧の中に沈んでしまった。価値観を喪失したともいえるかもしれません。若い世代に対しては、ぼくたちが責任を感じるべきは、夢のある未来社会を彼らに見せることができていることではないでしょうか。

人間のおとなはすべて、自分の子どもではない子どもに対しても責任をもっています。自分の子どもであるかにかかわらず、子どもを育てる。この性質を捨て去ってしまったら、人間は生きる意味を失ってしまふといってもいい。ぼくたちおとなが死んだ後に未来の社会を担い、生きていくのは彼らです。次世代の人たちはぼくたちが滅びた後の世界を見る権利をもっていて、彼らが見る世界のためにぼくたちは義務を果たさなくてはいけない。そして若者たちも、自分たちの次の世代に対し、どういう責任をもって、どんな世界を渡したらいいかを十分に考えなくてはなりません。それが^⑤人類共通の目標であることをあらためて認識する必要があります。

(山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち』)

*作問の都合上、一部省略・変更した箇所があります。

100

105

110

※¹ フィールドワーク…研究対象となる現地を訪れ、観察やインタビューを通じて問題解決を探る手法。

※² 直観力…過去の経験や記憶に基づいて瞬時に無意識的な判断を下す力のこと。

※³ 二次的自然…人が手を加えることで維持・管理されてきた自然環境のこと。

※⁴ 担保…保証すること。

問一

A・B

中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ところが

イ なおさら

ウ つまり

エ たとえば

オ だから

問二

傍線部①「生物としての野生の力」とありますが、これを言い換えた表現として最も適当な部分を本文中から十五字以内で抜き出さなさい。

問三 傍線部②「フィクションの世界」とありますが、これはどのような世界ですか。四十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部③「もっと人間本来の能力を発揮できる環境をつくるべきだし」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 行き当たりばったりを予測して生き残ってゆく野生の力を養えるよう、身の危険を感じるような経験をおとになる前に味わっておくべきだ。

イ 見えるものと見えないものとのつながりを感じる日本人特有の情緒を身につけられるよう、特に子どもの頃は厳しい環境に自ら飛び込むべきだ。

ウ スマホのGPS機能に頼らず人間本来の直観力でさまざまな障害を乗り越えられるよう、学生のうちにフィールドワークを経験しておくべきだ。

エ 人間としての自分の身体について子どもうちに自覚できるように、五感を使って自然と触れ合える環境をおとなが用意しておくべきだ。

問五 傍線部④「このまま情報化が進めば、人間は『考える』ことをやめるかもしれません」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 見たものや感じたことを脳の中に言葉でラベルを貼るようになる

と、人間の五感として脳に記憶する必要がなくなってしまうから。

イ テクノロジーが発達して記憶媒体が大容量になると、あらゆるものがデータベース化されて自分の脳を使わなくなってしまうから。

ウ 自分の欲求をクリック一つで済ませられるほどインターネットが発達すると、それ以上新たな技術が発明されなくなってしまうから。

エ AIなどが提示するものに人間が誘導されると、自分の好みや欲求を錯覚してあれこれと考えることがなくなってしまうから。

問六 傍線部⑤「人類共通の目標」について授業内で話し合った次の会

話を読み、1 3に当てはまる最も適当な表現を本

文中からそれぞれ五字で抜き出しなさい。

生徒A 筆者が子どもの頃には、科学技術の進歩による幸福な時代の到来がイメージできていた。でも、テクノロジーが生み出したAIは人間らしさそのものを脅かすようになったから、解決できない未来が見えてしまったんだね。

生徒B 1をすれば2が実現されるという価値観を、おとなたちが若い世代に提示できていない責任があると言っている。私たち子どもが生きる世界は、今のおとなたちが創る義務があるんだよ。

生徒C でも、その私たち子どもも、さらに若い世代へと引き継いでいく社会に責任があると書かれている。これからを生きる若者がどんな世界をデザインして次世代に手渡していくといいのか、私たちも無関心ではられないね。

生徒D おとなから子どもへ、さらにその次の世代へ、夢のある未来社会というバトンをリレーし続けていくこと、そこそが人間の3であり、人類共通の目標だということだね。

【三】 次の文章は紫式部が書いた『紫式部日記』の原文と現代語訳です。

藤原道長の娘彰子しやうしが、一条天皇の妃きになつてから初めての皇子みこ（親王）を産んでおよそ一ヶ月後の一日を描いています。これを読み、後の問いに答えなさい。

【原文】

十月かんづきとまかよか十余日じゆにちまでも、御帳みぢやう①出でさせたまはず。西のそばなる御座おましに、

夜も昼もさぶらふ。殿の、夜中にもあかつきにも参りたまひつつ、御おん②

乳母めのとの懐をひき探させたまふに、うちとけて寝たるときなどは、何心も

なくおぼほれておどろくも、いといとほしく見ゆ。心もとなき御ほど

を、わが心をやりてささげうつくしみたまふも、ことわりにめでたし。

あるときは、わりなきわざしたてまつ③かけ奉りたまへるを、御紐おんひもひき解きて、

御几帳みきちやうの後ろにてあぶらせたまふ。「あはれ、この宮の御しとに濡るる

は、うれしきわざかな。この濡れたるあぶるこそ、思ふやうなる心地④

すれ。」と喜ばせたまふ。

【現代語訳】

陰暦十月十日過ぎまで、※1 中宮彰子様はお休みどころをお出になら
ない。私たち※2 女房は、その西側の御座所で終日ア お仕えする。道長
様が、夜中でもイ 明け方でも参上なさっては、※3 乳母の懐をお探りに
なるので、安心して寝ているときなどは、訳もわからず寝ぼけてウ 目を
覚ますというのも、とても気の毒に思われる。※4 親王様のご様子がま
だ首もすわらず頼りないご様子なのを、道長様ご自分は満足した様子
で抱き上げて可愛がりなさるのも、
王様がとんでもないことをしかけ申し上げなさるのを、道長様は服の紐
を解いて、※5 御几帳の後ろで火で乾かしなさる。道長様は、「ああ、親
王様のおしつこに濡れるとは、嬉しいことだなあ。この濡れた着物を乾
かすことこそ、思いがかなった心地だよ。」と、お喜びになる。

※1 中宮……天皇の妃。皇后。

※2 女房……朝廷で身分の高い人に仕える女性。

※3 乳母……母親に代わって子供に乳を飲ませ、養い育てる女性。

※4 親王……一条天皇と彰子の子、敦成親王。後の後一条天皇。

※5 御几帳……公家の邸宅で用いられる家具の一種。絹織物をかけて間仕切りとした。

問一 二重傍線部ア「お仕える」、イ「明け方」、ウ「目を覚ます」について、対応する原文の単語をそれぞれ四字で抜き出しなさい。

問二 傍線部①「出でさせたまはず」の読みを、現代仮名遣いの平仮名に直して八字で書きなさい。

問三 傍線部②「御乳母の懐をひき探させたまふ」とありますが、道長はなぜそのような行為をしたのでしょうか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 親王の顔を見るため。
- イ 親王を寝かしつけるため。
- ウ 乳母の居場所を尋ねるため。
- エ 乳母の気持ちに寄り添うため。

問四 A に当てはまる現代語訳として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 断ることなど到底できなかつた
- イ もつともであり素晴らしいことだ
- ウ 大げさにならないようお祝いした
- エ わずかな喜びすら与えなかつた

問五 傍線部③「わりなきわざ」に関して、次の問いに答えなさい。

(1) 「わりなきわざ(とんでもないこと)」とは、誰が誰に何をしたことか、説明しなさい。

(2) このことを「わりなきわざ」と感じているのは誰か、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 道長
- イ 彰子
- ウ 親王
- エ 作者

(3) 「わりなきわざ」と対照的な表現を原文から六字で抜き出しなさい。

問六 傍線部④「思ふやうなる心地すれ」とありますが、親王が元気に育つ様子に道長が満足しているのは、単に孫がかわいいからではありません。なぜ道長は満足しているのでしょうか。その理由を考えて説明しなさい。

四

各傍線部の漢字は読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 床の間に雪舟の掛け軸をかける。
- ② 新入生の集いが講堂で行われる。
- ③ 奇をてらわずに定石通りに行う。
- ④ 明日からの一人旅の支度を整える。
- ⑤ 彼は面長なので帽子がよく似合う。
- ⑥ 危険をオカして新規事業を始める。
- ⑦ 萩原朔太郎の詩集を友人にカす。
- ⑧ キジョウの空論では何も解決しない。
- ⑨ 人生の喜怒アイラクを味わう。
- ⑩ 販売不振で赤字がヒッシの状況だ。